

俳諧”ひとり“考

はじめに

元禄七年（一六九四）九月、芭蕉は心ならずも大坂に老体を運んで、挙句の果てに翌月人生の終焉を迎えることとなった。当初の予定どおりに、ふたたび江戸にもどつていれば、芭蕉の人生のみならず、俳諧世界にどんな展開があり得たかと夢想すると、徒事あだごととはいえ、無念の想いが過ぎるばかりである。予定外の浪花行は、芭蕉本人にとつてはいうまでもなく、日本文学にとつても大きな悲運であり、また計り知れない損失となった。とはいふものの、この一か月余の大坂滞在が、芭蕉の文学や日本の俳諧にとつて、かけがえのない、崇遠なる遺産をのこした事実もまた見逃してはならない。来坂直後からの体調不良のなかであつて、ときに応じて俳席をかさねつつ詠じられた句の

なかには、軽々しくすばらしいなどという語で済ますには余りある、深淵さや尊厳さを秘めた作が存することを軽視するわけにはいかない。一読胸をうつ名句というにとどまらず、俳諧ひと筋に生きた芭蕉の人生そのものと引きあう重みをもつほどの作品すら生み出されている。この句も、それだけの深意をそなえた発句といつてよいだろう。

所思

此道や行人なしに秋の暮

この掲出は、泥足編『其便』（元禄七年刊）によつたもので、半歌仙の発句として詠まれたと記録されている。だがこれ以外にも、各句に小異を有する句形が知られており、前書について

藤田真一

も、有無を含めて多様なかたちが伝わっている。そのなかで、日付の明確な資料としては、九月二十三日付の意専・土芳にあつた書簡中のもので、「秋暮」という前書とともに、「この道を行人なしに秋の暮」と詠じられた句形が確認できる。また、九月二十五日付の曲翠宛書簡では、同句形をしるしたあとに、「人声や此道かへる共句作申候」と、小異とはいいがたい別案が存在したことを報じている。

また芭蕉没後の元禄八年八月に出された支考編『笈日記』には、九月二十六日の日付とともに、さらに詳しい経緯がしるされている。

廿六日は清水の茶店に遊吟して、泥足が集の俳諧あり。
連衆十二人。

人声や此道かへる秋のくれ

此道や行人なしに穠の暮

此二句の間いづれをかと申されしに、「この道や行ひとなしに」と独歩したる所、誰かその後にしたがひ候半とて、そこに「所思」といふ題をつけて、半哥仙侍り。

この証言は、日付が前出の書簡とは明らかに齟齬を来してお

り、前書も見過ごしにはできない相違があるので、信憑性を疑つてみる必要があるとされている。ただし、編者の支考もこの歌仙に一座しており、異形句のあり様も不審なところはなく、ただ日付だけが事実を疑わせる仕儀となつてゐる。かりに日付を支考の記憶違いとして免ずれば、不審はいちおう解消されるだろう。

そこでもうひとつの問題は前書である。門人にあつた手紙では「秋暮」となつており、この前書のもとに発句をみるなら、とりあえずは、人つ子一人いない暮秋の夕暮れ時の、寂然たる風景を詠じた句と理解される。そこに世の中の無常や人生の侘びめいた息吹を察知するのは可能であつたとしても、とりたてて高適な文学性を導くとまではいえないだろう。

ところが推敲にあつて、前出の前書「所思」を置いて解してみると、たんなる秋暮の一景ではすまなくなる。所感、思念、想念などといった、人生観や思想性に比肩するような觀念が交錯してくる。あるいは、初唐・宋之問の「下山歌」の初句「下高山兮多所思」（高山を下れば思ふ所多し）のように、文学的情意をいうこともある。芭蕉の初志は、とりあえず秋景の一樣相をとらえたものだったとしてよいが、心の知れた連衆と座をくむうちに、たんなる一景ではすまない深意が浮揚してきたの

かもしれない。となると、もはや芭蕉個人の一存ではすまないことになり、本句にひそむ奥深い内意を浮き彫りにしつつ味わうべき一句ということになる。

こうして本句を見なおすならば、ここまでひたむきに歩んできた俳諧五十年の人生があり、多くの仲間や門弟たちとたしなむのはわが身ただ一人しかない風景が眼前に広がるばかりであった、とならないか。そうすると、たった「ひとり」の、吾のみの俳諧世界であったことに思いを致すばかりとなる。

ほんのいまそのことに気づいた芭蕉であったとして、それは最晩年のことだけではなく、これまでも折につけ明滅するおもしろいものであった。本稿では、「ひとり」という一点を見すえつつ、「行人なしに」と感慨をこめた芭蕉の俳諧をながめようと試みたものである。この「ひとり」への視点が、俳諧という文芸をふくよかに培ってきたさまを一顧してみたいとおもう。

一 同伴のよすが

『東海道中膝栗毛』の弥次郎兵衛と喜多八を待たずとも、戦鬨が途絶え、道路網や航路が整備された江戸時代には、遠路に

連れを伴うことはごくありふれた旅姿だった。とりわけ、こともなげに旅を繰り返した俳人たちは、同伴にせよ、付き添いにせよ、隨身・下男にせよ、関係は各様でありつつ、旅は二人以上連れ添ってなされるのが一般的だった^②。

俳人の旅行記といえ、何をおいても『奥の細道』がまっさきに思い浮かぶだろう。現代から振り返って、最高の俳諧紀行文学であるのはむろんのこと、おそらく元禄以後の俳人にとつて、まずもつて範とすべき、味わい深い作品だったはずである。そうして、みちのく紀行はあこがれの旅路となり、ひとたび俳句作者を志したかぎりは、奥州は生涯に一度は訪ねてみたい地域であったにちがいない。さらには、俳人として求められるべきキャリアのひとつでもあっただろう。

そんな「奥の細道」の旅も、けっして芭蕉の一人旅だったのではなく、つねにだれか連れ添う人物があった。とはいえ、この作品に親しんだ者ならすでに周知のことだが、出発の江戸から、奥州・北陸を経由して、終着の大垣まで、ずっと同一人物が芭蕉と同伴だったわけではない。そこで、同行者に焦点をあてて、改めて旅をたどっておくこととする。

『奥の細道』の出だしは、言うまでもなく、「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」と、人生を旅になぞらえるモ

チーフのことはで始まる。そして住みなれた庵を離れて、いったん借宅に移り、いざ旅立ちという前夜には知友・仲間や門人が送別会を催してくれた。その翌朝、別れを惜しみつつ船にのって出発という段取りになっている。そのあと、「ことし元禄二とせにや、奥羽長途の行脚、只かりそめに思ひたちて」云々と、この大旅行を思い立っていたいわれを吐露するのだが、ここに至ってもなお同行者の存在に触れることなく、単身旅行としかみえないようにつづられてゆく。そしてかなり行を進めてから、ようやくこの文言に逢着する。

室の八島に詣す。同行曾良が曰。

そう、同行者があつたのだ。単独行ではなく、門弟の曾良がいっしょだったのだ。その曾良の口を借りて、室の八島に祀られる大神神社おみみわの謂われが述べられる。案内役としては、吉川惟足に神道を学んだ曾良にとって、まさにうつつけの場での登場であった。

それにしても、室の八島といえは下野の国（栃木県）にある名所である、江戸からはすでにかなりの距離を行っているはずである。「弥生も末の七日」（曾良の『旅日記』によると、三月

二十日）に江戸を出て、室の八島に至るのは三月二十九日、翌日は日光山の麓に宿をとることになる。曾良に室の八島の神社を紹介させるのは、いかにも所を得た処遇と言えるが、それにしても、出発からは時も所もかけ離れているといわざるをえない。むろんそれが作者芭蕉の文学的趣向といえは言えなくもない。あるいは、同行者の存在は、言わずとも知れた事実だった故という、暗黙の了解を前提とした描き方も解される。

ともかく、この旅行は芭蕉と曾良の二人旅だったことが、ここではじめて明らかになる。この組み合わせは奥州一円を経て北陸を旅するあいだ、ずっと続いてゆくことになる（越後路で一日、別行動がある）。曾良の名前は紀行文の折につけて記載され、また時に応じて曾良作の発句が紹介される。

ところがやがて、このペアが崩れるときがやってくる。金沢を過ぎて、山中温泉にたどり着いたときである。曾良が体調に異変を来す事態に見舞われた。

曾良は腹を病て、伊勢の長島と云所にゆかりあれば、先立て行に、

行く／＼たふれ伏とも萩の原 曾良

こうなると、以後は芭蕉のひとり旅になるかと思いきや、そうはならなかった。丸岡の天竜寺の場面には、「金沢の北枝といふもの、かりそめに見送りて此処までしたひ来る」とあって、別人がちゃんと芭蕉に付き添って旅は継続されてゆくのだ（じつは竹意も同行）。ただし丸岡から永平寺を経て福井に至るまで、わずかの距離ながら、『奥の細道』によるかぎり、同行者の確認ができず、芭蕉ひとりの歩行だったかのようである。

しかし福井に到着するや、かねて顔見知りの等裁という「隠士」の家を訪ねている。そのときは留守だったものの、出先を訪ねて出逢い、久闊を叙することになる。福井から敦賀の津までは、この等裁が道案内をするかのように同行する。敦賀ではふつうの宿に泊ったようだが、種の浜へと舟遊びをしたのち、いよいよ大垣へ向かおうとすると、芭蕉の動静を見越したように、弟子の露通（路通）が迎えに来ていた。そして、馬まで用意してあり、「駒にたすけられて大垣の庄に入」といって、奥州・北陸旅行を終焉させる。大垣につくと、大勢の門人らが芭蕉の到着を出迎えて、この大旅行の成就をことほぎつつ、「奥の細道」の旅もとりあえず一段落を迎えることになる。

こうして全行程をたどってゆくと、江戸出発から大垣到着までの旅程のほとんどは、だれかが芭蕉に連れ添っていたことが

判明する。わずかに丸岡から福井のあいだのみ、ひよっとしてひとりきりだったかもしれない。でも、それは曾良の体の変調がもたらした予期せぬ事態であって、本来なら全行程を曾良がともにすることになっていたはずである。しかしその後は、曾良の不在を補うかのように、各地の俳人たちが代替を務めてくれた。

これが芭蕉の奥州旅行の実態だったのである。

あえて最長の「奥の細道」を取り上げたのだが、だれかが芭蕉と旅をともにしているというのは、これにかぎったことではなかった。紀行文として残された作品を中心に、数ある芭蕉の旅をざっと確認しておこう。

まず、『野ざらし紀行』（『甲子吟行』）である。貞享元年（一六八四）八月に江戸を発足して、故郷伊賀で新年を迎え、畿内をめぐる、四月の末には江戸にもどる、という旅であった。この作品では、冒頭すぐのところ、なまぢ「何某ちりと云けるは、此たびみちのたすけとなりて、万いたはり心を尽し侍る。常に莫逆の交ふかく、朋友信有哉此人」と紹介がなされる、千里という人物と同道している。もとより芭蕉のもとで俳諧をやっていた俳人だが、芭蕉の帰省にあわせていっしょに帰ることになったようだ。実家は大和の国竹内村で、伊賀への行路とほぼ

重なる旅程であった。

芭蕉は前年に没した亡母の菩提を弔ったのち、そのまま千里の帰省に伴い、竹内村にしばらく足をとどめたあと、千里とは別れてさらなる旅へと向かうことになる。直後に吉野を訪れるその冒頭に、「独よし野、おくにたどりけるに」とあるように、ひとまずは単独旅行だったようである。しかしその後も、同行者らしき人物は描かれず、ひとり旅を続けたかにみられる。そして大垣の木因亭にたどりついたところで、この一句をしたためる。

死にもせぬ旅寝の果よ秋の暮

緊張感すらただよわせる句ぶりからすると、同行者はなく、ずっと単身紀行だったかにみえる。ただし、畿内をひとめぐりして大垣の木因亭にたどり着いたところで、右の一句をよんで、旅は一段落となる。ふたたび腰を上げて発足するに際して、木因も同道して、かの「歌物狂二人木がらし姿かな」（木因『桜下文集』）の詠とともに、桑名まで行をともしにする。ここで行脚、狂いの同志が連れ添うことになった。

芭蕉はその足で名古屋に至るや、『冬の日』五歌仙をなしと

げるほどの連衆に恵まれるが、年末にはひとり故郷伊賀へと再度の帰省をなすことになる。新年を過ごした翌春、故郷をたつて、奈良から京・近江をめぐり、いよいよ江戸をめざして東海道をたどってゆく。その帰途が開始された直後、感激的な出会いをなす事件に遭遇する。

水口にて二十年を経て、故人に逢ふ

命二ツの中に生たる桜哉

「故人」とは昔馴染み、ここでは伊賀の知友土芳（服部氏）をさす。二十年ぶりの再会だったという。「命二ツの中」とは、たんに久しぶりに出会ったふたり、などといった型どおりの物言いではずまない重みを有している。と同時に、やはりひとり旅のなかでの再会となれば、感激ひとしおの響きを否定することはできない。

かく「野ざらし紀行」の後半は、ほとんど単独旅行でありつつ、風雅の同心者の許を訪ねて回るかと思えば、またこうした劇的な対面を果たすこともあった。

さて、「野ざらし紀行」の上方旅行から江戸に帰って三年後、常陸の国鹿島へと小旅行に出かける。このときの連れ合いは一

人ではなかった。「ともなふ人ふたり、浪客の士ひとり、ひとり水雲の僧」と紹介されている。浪客の士とは曾良をさし、水雲の僧とは深川の芭蕉庵のとなりに住んでいた宗波のことである。旧知の間柄だった鹿島・根本寺の仏頂和尚を訪ねて、月見をともしする旅となった。

同じ貞享四年の初冬には、ふたたび帰省をかねた上方旅行を実施した。このときのことをしるした紀行文が、『笈の小文』として知られるものだが、この作品については一筋縄ではいかない問題をはらんでいるので、第二・第三章で改めて取り上げることにする。

ただしその帰路は、名古屋から美濃を経由、信州をまわって帰江するという旅となり、別途いわゆる『更科紀行』という作品にまとめられている。これを「笈の小文」と切り離して独立した旅行と考えてみると、同行者は以下の文章のようになる。

ともに風雲の情をくるはずもの又ひとり、越人と云。木曾路は山深く道さがしく、旅寐の事も心もとなしと、荷兮子が奴僕をしておくらす。

ここでは、門人の越人に加えて、旅の助けとして、荷兮の下

男が付き添ってくれたという。こうしてみると、同伴者は風雅をともしする旅客のみならず、時によっては、足もとや身の周りを世話する下働きの者のこともあったようだ。

このあとの旅となると、すでに一覽した「奥の細道」の旅ということになる。その奥州旅行のあとは、しばらく上方近辺を遊歴したのち、元禄四年九月末にふたたび江戸に向かって旅立つことになる。これを描いた紀行作品はないのだが、血縁のある門人の桃隣が同行したことがわかっている。さらに、芭蕉最後の旅となる、元禄七年五月に江戸をたつ際には、二郎兵衛が連れ添って東海道を帰省の途につく。

以上のごとく、わかっているかぎりでは、遠路におもむく芭蕉の旅には、ほぼつねに誰かが付き添っていたと考えられる。単身旅行はよほど例外的だったとしてよいだろう。

二 「旅は道つれ」

連れ合いを伴って旅に出るというのは、むしろ芭蕉ばかりではない。四十そこそこで「翁」と呼ばれていたからといって、早くから芭蕉が年寄りじみて、同伴者の介添えが必要だったというわけではない。蕉門撰集などの俳書のそここに旅をテー

マにした句文が見られるが、単身の旅ではなく、複数で旅する場面を詠じるケースがしばしばみられる。とりあえず、発句にかぎっていくつかを掲出してみよう。

さらしなに行人々にむかひて

更級の月は二人に見られけり 荷兮（『あら野』）

越の新潟と云所より、しれる人のおくりけるに別る、
とて

馬駕にわかれてふたり秋のくれ 千那（『鎌倉海道』）

むかしとや二人行脚の盆せしが 曾良（『続別座敷』）

行脚の僧とつれだちて

いざ我も鉢の供せんけしの花 露川（『男風流』）

最初の荷兮の句は、芭蕉と越人の更科月見行の送別吟である。二句めは、どういう旅か知れないが、旅立つ者が詠む留別の句である。あとの二句はそれぞれ、旅中に詠まれた作とみられる。こうした二人連れの旅の句は、撰集をひもとくと頻繁に目にすることができる。最後の露川についていえば、こんな作も見いだせる。

誰もいふ旅は道づれ老の坂 露川（『幾人水主』）

この句は、いわゆる「旅は道連れ世は情け」の慣用語を援用しながら、手を携えて老齡の坂道を這いのぼるさまが詠まれている。人生を旅になずらえるだけでなく、老来、助け合って生き抜こうという句作になっている。

またその露川の紀行文『宝永己丑美濃吟行』の冒頭は、こんなかたちで始まる。

宝永六の華、漸納まる比、吞水子を伴ひて、東の美濃路に趣ける。其日雨そほ降ければ、

春雨の美濃路を茶のみ行脚哉

まさに茶飲み友だちどうしの、二人連れ行脚の始まりである。許六編『本朝文選』所収の「旅賦」にも、つぎのような一節を見ることができる。

道づれの上をいはゞ、船頭の胸づくしをとり、駕籠廻しをたゞき、馬さしとつかみ合、一僕の跡にさがるをぬめまはし、鶏のなかぬにつれの男を起し、挑灯とぼし

て夜道を行を手柄とし、入湯の一―番に入りたがるは
何の為ぞや。

ここでは、道連れの旅姿をやや皮肉めいた口調で描いている。
湖水河川を運ぶ船頭の姿をみれば胸倉をつかみもし、宿駅で荷
物の差配をする馬差しの役人とはとつ組み合いもする、下男面
の男には後ろからにらみつけるかと思えば、鶏が鳴く前の真つ
暗な道を行くのを手柄顔で威張つて見せ、宿に着けば一番風呂
に入りたがる、こんな不屈き者でも道連れには違いないのだと
いう。かなり極道ぶつた、目をそむけたくなるような手合いで
はあるが、現実にはこういつた同行者もないではなかったのだと
あろう。

『本朝文選』にはまた別に、こんな道連れの出立ちも描かれ
ている。

笠はあるにまかせ、雨をしのぐ物に菅蓑はあれど、今
様は合羽で仕廻ふ。銭を入たるは草鞋一―足にて、
天晴旅人の出立は出来たり。

これは「南行ノ紀」と題された文章で、李由と許六の合作と

なっている。ということはおそらく兩名同行の旅姿を面白
かしく描いて見せたということだろう。この旅中でも、「布
引山の山の中に、道づれせばやと見れば、見しれる聖なりけり」
と、偶然にも知り合いの僧侶に出会って同行することになった
というのである。

こうして見てゆくと、同行者が二人、三人と複数で旅をする
のは、江戸の時代にすでにごくふつうのありようで、芭蕉が同
伴者ともども旅するというのが特異な例ではけつしてなかった
ことになる。この現象は元禄期にかぎったことではない。いち
いち文例をあげることはないが、中興期でもたとえば、也有
の俳文集『鶉衣』や、蝶夢の数々の紀行文においても、旅にで
るとなると、なにがしかの人物が連れ添っているさまが見て取
れる。これが四国八十八箇所廻りともなると、まるで現代のツ
アーにも等しい団体旅行となる。

となると、さかのぼって、貞享四年の「笈の小文」のときも、
ともに旅をする連れがあってもふしぎではない。しかし、この
ときは、江戸出発に先立つて、盛大な送別会が催されたものの、
同伴者の存在は見出すことができない。たまたまなのか、ある
いは思うところがあつたことなのか、まったく不明ながら、
江戸出発は芭蕉ひとりだったようである。ところが、途中から

その様相が変わってくるのである。

『笈の小文』に描かれる旅立ちはこう書かれている。

草庵に酒肴携へ来りて行衛を祝し、名残をおしみなどする
こそ、ゆへある人の首途かどするにも似たりと、いと物めかし
く覚えられけれ。

自分じしんの出発が、まるで高い身分や由緒正しき人物を送るときにも似た物々しい祝賀であったと、やや自嘲気味な物言いになっている。その祝宴のようすは、『句餞別』のなかによくわしく報じられている。句友ともいふべき素堂は、以下のように物めかして序している。

芭蕉庵主、しばらく故国にかへりなんとす。とめる人はたからを送り、才ある人はことばを送るべきに、我此二ツにあづからず。むかしもろこしのさかひにかよひけるころ、一ツの烏巾を得たり。これをあたへて、たからと才にかふるものならし。

もろこしのよしの、奥の頭巾かな 素堂山子

芭蕉の旅立ちにあたって、相応の金銭のなければ、気のきいた句文の才能もないおのれは、ただ最近手に入れたまつ黒の頭巾を差し上げる能しかありません、と卑下めかした送別吟を託した。いかにも俳士の送別の場にふさわしい発句である。もちろん、この頭巾が芭蕉にお似合いだという賛美をこめて詠んだのはまちがいない。

その場には、奥州磐城平藩主内藤家の次男として生まれて、俳人としても活躍していた、所縁えんじ深き露沾も同席していた。そんな人物が、この一句を詠じて芭蕉の旅立ちを賀した。

時は秋吉野をこめし旅のつと 露沾

そしてこの句に芭蕉は、「雁をともねに雲風の月」と脇を付けた。以下付句を重ねて、六吟の歌仙を成就させている。露沾発句には、「旅泊に年を越て、よしの、花にこゝろせん事を申す」と前書が付されている。これは発句の中七「吉野をこめし」に映発しているとみてよいだろう。

ただし、『笈の小文』では、前書は省かれていて、発句のみとなっている。むろん歌仙も『笈の小文』には採録されていない。しかし、「はなむけの初として、旧友・親疎・門人等、あ

るは詩歌文章をもて訪ひ、或は草鞋の料を包て志を見す」と、『句餞別』で餞別の賀宴のにぎわいぶりを叙してある文章が、「詩歌文章をもて訪」れたさまとして丹念に記録されている。『句餞別』ではまさしく漢詩・和歌・発句、それに連句と、盛り沢山の送別詩句を目にすることができるといえる。乞食こじきことき隠者俳人と自他共に許していたはずの芭蕉には、まるで不相応な送別会のにぎにぎしさが伝わってくる。

送別会の雰囲気には、言い古されたわび・さびの観念を捨て去ったかのように、久しぶりの故郷帰りとあって、旅行の成果にたいする期待がこめられたさまがうかがえる。あたかもまったく芭蕉らしくないとはいえ、ある意味では、「俳隠」の隠れ蓑を脱ぎ去った芭蕉本然の姿をあらわしているとみることがも不可能ではない。

ところが、これほどの高揚を背景にした旅立ちだったにもかかわらず、この旅に何某かの同行者の存在は気配すらみられない。紀行文『笈の小文』では、首途に異例な物めかしさを示した直後、「抑道の日記といふものは」で始まる、周知の紀行文論を展開、それが一段落するや、一気に尾張の鳴海まで飛んでしまう。すなわち、江戸発足の具体的な叙述もなければ、『野ざらし紀行』におけることき東海道の景も描かれない。もちろ

ん同行者の有無にはいっさい触れないままに、鳴海まで来てしまったことになる。ただ事実としては、鳴海から保美まで越人が同行しているが、紀行文にはいっさいしるされない。故意に伏せたのか、もしくはテキストの問題か、ただちには判断できない。

三 「ひとり」から「ふたり」へ

こうして見てゆくと、この種の慣れた上方旅行はおよそ単独行だったかというところ、それもまたちがつている。鳴海を過ぎたところで、「京まではまだ半空や雪の雲」の句を書きつけたかとおもうと、つぎにはいきなりこんな文章がやってくる。

三川⑧の国保美といふ処に、杜国がしのびて有けるをとぶらはむと、まづ越人に消息して、鳴海より跡ざまに二十五里尋かへりて、其夜吉田に泊る。

杜国といえ、先年の「野ざらし紀行」の途次、名古屋で五巻の歌仙を巻いたときの連衆のひとりである。一連衆というにとどまらず、その旅を終えるに際して、名古屋連衆のうち杜国

にだけ、「白げしにはねもぐ蝶の形見哉」の句を送ったというほどに、目をかけた人物だった。ところが後日、商売上の罪に座して、渥美半島の三保に流罪にあうという悲運に見舞われた。事件は旅中、おそらく名古屋近くで知ったのだらう、芭蕉は杜国に逢うためにわざわざ道を引き返す決意を示した。越人が同行し、途中の吉田で一夜をともしにして、この一句書き残した。

寒けれど二人寐る夜ぞ頼もしき

路程をわざわざ反転する芭蕉の行動、そして罪科に見舞われて異郷にあるかのひととの再会をめざす、こうした切実な思いがみごとに表出された一句である。ここでは、中七の「二人」の文字が、両者支えあう切実な思いを如実にしめしている。久闊を叙すといった相応の期待感と、この人物への特別な情感が交差して、あふれんばかりの温かみがかもしだされる。ひよっとして、杜国の身柄の危うさだけでなく、ここまで旅をしてきた芭蕉の独り身の心情が、たえず奥底にたゆたっていたからこそその安堵感を汲みとつてもいいかもしれない。

さてその直後、この土地柄に関して、渡り鳥としての鷹が渡ってくる場所で、それを「いらご鷹」と紹介する。そしてこの一

句を書き付けるのである。

鷹一つ見付てうれしいらご崎

この続き具合をみるかぎりでは、前の杜国との再会をめざす気配はどこにもなくて、杜国の影はあつさりど消え失せ、まったく別の話題に移っているかにみられる。だが、この句が西行のある和歌に寄りそつて詠じられていることを知ったなら、たんに大空を舞う一羽の鷹の姿を詠んだものではないことに気づかされ、さらにそれが、前の杜国との出会いと浅からぬ所縁ゆかりのあることがわかる。西行の和歌とは、『山家集』中のこの一首である（前書とも岩波文庫『西行全歌集』による。以下同）。

二つありける鷹の、伊良湖渡りをすると申けるが、一つの鷹は止まりて、木の末に懸りて待と申けるを聞き
て、

巢鷹渡る伊良湖が崎を疑ひてなほ木に帰る山帰りかな

芭蕉が見かけた同じ鷹を詠んでいるというにとどまらず、鷹の舞っているところも同じ伊良湖の岬だった。西行の和歌では、

はじめ二羽が連れ添って飛んでいたのが、一羽が離れて木の上に止まった姿をみて詠まれている。樹上に作られた巢にいる鷹は、人間に捕えられて人工的に飼育されている鳥で、大空を飛ぶ自由の鷹とは異なるのだが、その疑念があつても、巢のある木に戻ろうとする鷹のすがたにことよせてうたわれている。この二羽の一体感を以て、芭蕉は独り残された杜国との結びつきを痛切に感じ取ったのではないだろうか。その想いが「鷹一つ」の句となったのだとすると、三保の地にいる杜国との精神的紐帯のつよさを詠んでみせたとも解される。

二人の「二」と一人の「一」はここにきて、芭蕉と杜国の一心同体ならんとする組み合わせになりおさせた。そのためには、西行の和歌に芭蕉の発句を重ねて理解することが必須となる。

二人は、再会の折にある約束をかわしたようである。来春には伊勢でふたたび出会って、二人して吉野の桜を見に行こう、というものである。貞享五年（一六八八）二月中旬ころの杉風宛書簡のなかで、芭蕉は「尾張の杜国もよし野へ行脚せんと伊勢迄来候而、只今一所に居候」と報じている。また『笈の小文』のなかでは、「いせにて出むかひ、ともに旅寐のあはれをも見、且は我為に童子となりて、道の便りにもならんと、自万菊丸と名をいふ」と、二人ともふざけ気味に戯れ合つて吉野花見に

出かけることになる。そして吉野の山に分け行つて、双方ともども念願の花見を満喫した。

両者はそれで別れたわけではなく、以後しばらく行を共にして、二人行脚を味わつた。吉野の処々をめぐつたあとは、高野から和歌山、初瀬から奈良へ出て、さらに須磨・明石まで脚をのばした。どこで別れたのかは不明だが、芭蕉の足跡を重ねて考えれば、名古屋まで同行したのではとおもいたくもなるが、ただ杜国の立場を考慮すると、名古屋にはいっしょに入りようがなかつただろう。

杜国はこの二年後に、流寓の地で三十年余の短い命を終えた。それだけに、杜国にとっては生涯忘れ得ない旅となつたようである。越人編の『鵲尾冠』（享保二年成）に寄せた句文には、伊良湖へ帰つたのち、「なす業もなく旅行の吟」をつぶやいていたという。そのなかの一句「年の夜や吉野見て来た檜笠」を見ると、芭蕉との吉野花見は終生忘れがたいものになつたことは容易に想像される。

旅というシチュエーションに限らず、どんな境遇であつても、我ひとり、の存在というのは、孤独や寂寞、あるいは悲壮や緊張といった人間存在の究極を思い知らされるものである。さまざままな人びととともに生きてゆく、ごくふつうの人生はもちろん、

仲間や門人たちと句会や吟行を共にする俳諧という文芸においても、非常の事態とわきまえねばならない。俳諧ではときにそうした環境を詠じた句がみられる。七部集からいくつかを拾ってみよう。

独り寐や泣たる貞にまどの月

野水（『あら野』）

独マいて留守ものすごし稲の殿

一東（『炭俵』）

其角にわかるゝとき

あゝたつたひとりたつたる冬の宿

荷兮（『あら野』）

孤独の相がはつきり打ち出されて、泣くこともあれば、淋しさにおののくこともある。また友人との別れに、孤独をひしと感じるといった心中がよまれている句もある。同様の句ぶりの作を『蕉門名家句集』上・下（古典俳文学大系）から拾い上げてみると、「昼貞のひとり露けき袂かな」（越人）、「秋ひとり琴柱はづれて寐ぬ夜かな」（荷兮）、「うら風に松はひとりのさむさかな」（智月）など、いくつも目にするができる。たしかに自己の孤独の相を見つめて、寂寥の思いを発句にするのはつらいとはいえ、これもまた人間が営む文芸の宿命といえる。

しかしながらその一方で、孤独を自覚したうえで、おなじ人

間どうしの友愛や、自然の情景に安らぎを覚えることもまた真実であり、そうした情を感じせしめる句も珍しくはない。

独来て友選びけり花のやま

冬松（『あら野』）

岩はなやこ、にもひとり月の客

去来（『笈日記』）

なつかしや身ひとりに降山桜

琴風（『其角十七回忌』）

月に来て我もひとりの雁の代

土芳（『蓑虫庵集』）

こういった発句を目にすると、寂然の思いよりも、寄りそう何者か、また何事かを思わせることよって、「ひとり」に発する福々しさを感じさせるようにもみられる。そして、「ひとり」が「ふたり」になったときは、さらに人としての温もりがかもしだされてくる。

更級の月は二人に見られけり

荷兮（『あら野』）

淋しさもふたりに成りぬとしの暮

土芳（『蓑虫庵集』）

ひとりさへ花に二人の別かな

野紅（自筆本『若艸』）

『笈の小文』で、当初は単身の旅だった芭蕉が、途中で悲劇に見舞われた杜国と合流してふたりの旅となる。そこから旅の

興趣だけに終わらない、連れ合いの悦びを伴った旅に変容する。「二」と「三」は、数としてみるとわずかの違いでしかないが、その一方で決定的な懸隔を生ずることもあり、あるいは、「一」と「二」の心情が、たちまちに入れ替わることもある。「二」と「三」は微妙な小差であると同時に、二倍、三倍とあつという間に大差となることもある。逆にまた、「孤」の詩心へと凝縮せしめることもあれば、連衆ならではの同心と緊張の精神を導く導線にもなる。座を本分とする俳諧文芸のなかで、「孤」に徹する意思をもつ、俳諧の力というものを見直すべきだろう。

四 「独」の俳諧性

ところで、貞享初年の「野ざらし紀行」の旅であるが、江戸を出発したときは千里という弟子と共連れであったのだが、大和の竹内村で千里と別れてからはどうあったのか。それについては、一章でもわずかにふれたが、その直後、作品のなかでは以下のように書かれている。

独よし野、おくにたどりけるに、まことに山ふかく、白雲峯に重り、烟雨谷を埋めて、山賤の家処々にちいさく、西

に木を伐音東にひびき、院々の鐘の声は心の底にこたふ。むかしよりこの山に入て世を忘たる人の、おほくは詩にのがれ、歌にかくる。

吉野山をかくも簡潔明瞭に描ききつて、まことに名文というにふさわしい一節といえる。深山幽谷の景を自然のたたずまいのなかで描くかとおもえば、そんな山中でひっそりと生活を営む人々の活動ぶりや、また由緒ある寺院の鐘の音に心を奪われるさまをかたる。しかもそうした光景を、それと意識させないかたちで対句表現を用いて、文章として心地よいリズムに引きこんで、まさしく陶醉させるかのようなのである。

この叙景のみごとさのうえに、世間から離れて吉野の山奥に隠れ棲み、詩歌に身も心も預ける人間のいることをつづっている。はからずも吉野が芭蕉のあこがれの地であることを述懐しつつ、みずからの足でこの地をたどってきたことを述べている。おそらく芭蕉はこれまで一度も吉野に足を踏み入れたことはなく、これが初体験だったとおもわれる。千里と竹内村まで同行したことが、それを促したとみなすこともできる。

ただ、季節は晩秋、となると、吉野最上の見ものであるべき桜の花には、まったく季節はずれとしか言いようがなかった。

その花のことはいっさい口に出さず、かわつて、閑静そのものの山奥のたたずまいに加えて、いにしえより詩歌を詠じる者にとって憧憬の地であることを語ることに徹した。

さてそこで気になるのは、冒頭の「独」の文字である。単純に考えれば、ここまで行を共にしてきた千里と離別して、単独行になったことを言ったにすぎないといえる。しかしこの吉野山が、ありきたりの詩歌の名所（歌枕）というにとどまらず、芭蕉個人にとつて、あるいは芭蕉文学にとつて、なんとしても足を向けずにはおれない場所であったことも見逃してはなるまい。だからこそ、かりに独行であろうと、この度は是が非でも行くのだというつよい思いが、「独」の一字にこめられていると考えることもできる。

それを促したのは、極論すれば「西行」をおいてほかにありえない。西行は年々歳々吉野に入つては花を愛で、あるいは庵を結んで庵住のときを過ごした。『山家集』を繰つてゆくと、そうした西行の姿を詠じた歌が陸續と見出される。

吉野山雲をはかりに尋ね入りて心にかけてし花を見るかな
吉野山梢の花を見し日より心は身にも添はず成にき
木の本に旅寝をすれば吉野山花のふすまを着する春風

吉野をうたった類似の和歌は枚挙にいとまがない。こうした吉野の花の歌が数限りなく見られる一方、世にそむく隠遁の思いを詠じた歌もまた少なからず目につく。

世の中をそむきはてぬといひおかん思ひ知るべき人はなくとも

世を捨てて谷底に住む人見よと峰の木の間を分る月影
ひとり住む庵に月のさし来ずは何か山辺の友にならまし

これら三首は必ずしも吉野を詠んだものではないが、ある意味では、俗世を捨てた西行の本源的精神からでた和歌ともいえる。そして、西行の吉野といえは、この歌にとどめをさす。

吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらん

花の咲いているあいだは吉野に籠るのもやむを得ないとして、花が散つてしまえば、ただちに山から降りてくるはずだと人びとは待っているだろう、という歌なのだが、豈はからんや、花がなくなつてもただちに山をでるわけではないよ、という本

心が裏に透けてみえるのではないか。吉野の花の魅力は尽きせぬものではあるが、そのみで吉野に籠るのではなく、わが心身を研ぎ澄まして、人生や死後への思いを突き詰める場として、西行にとって吉野は最高の地であったにちがいない。それはまた独りになりきってこそ維持できる精神性というべきかもしれない。しばしば西行は世を捨てたはずの人間なのに、あれほど花に執着するのは矛盾だと言われるが、花だけに捉われていのではないと考えることによって、それは矛盾などと批判がましく言わずともよくなるのではないか。

芭蕉が『野ざらし紀行』において、吉野行き直前に「独」の文字をすえたのは、単独行という表面的な旅姿を越えて、西行の思念に心を寄せてあえて書き付けたとするならば、軽々しく見過ごすべき文字ではなくなる。ただし芭蕉が吉野へ行くに際して、「独り」にこだわったわけではないことは、三年後の杜国との吉野花見行をみれば納得できる。このときは、「独り」を脇において、三年前には果たせなかった吉野の花を第一の目標としたのである。そして、落魄の境地にある愛弟子杜国と連れだつて花見を満喫することを、何よりの喜びとした。その思いをくみ取った杜国は、あえて「万菊丸」と童らしき名にわが身を仮託して付き添ったわけである。連れの杜国のいでたちの

うちにも、「一」と「二」のありようを思い知るべきだろう。

ところで、この「独」の文字を、芭蕉とはべつの意味で駆使してみせたのが、蕪村であった。蕪村は芭蕉のように旅の人生を送り、紀行文を書き残そうとしたひとではないが、京の市中に住まいしつとも、ときに郊外に吟行することがあったらしい。そんななかで、吟行の経験をつづった、こんな句文がある。

ひとり、大原野、ほとり吟行しけるに、田疇荒蕪して、
千ぐさの下葉霜をしのぎ、つれなきあきの日影をたのみて、はつかに花の咲出たるなど、ことにあはれ深し。

水かれく、蓼歟あらぬ歟蕎麦歟否歟

右に掲げた句文は『蕪村句集』所載のものだが、制作年次は不明とされている。ここにいる「大原野」は、比叡山麓にある地域（大原）ではなく、都の西南、現在の京都市西京区の丘陵地帯をさす。東北方面の大原とはちよつど、京都市域をはさんで対角線上に位置する。いずれも古くからの歌枕として、和歌に詠じられてきた名所である。

ある日蕪村は晩秋の情趣を味わおうと、ひとりで吟行に出かけることにした。蕪村の住まいは、四条烏丸のやや西南、烏

丸仏光寺西入付近であつた。自宅から大原野まではかなりの距離があり、徒歩だつたとすると、行くだけでも数時間を要するだろう。それもたつたひとりで行くのである。思いがけぬ興味がわいたのか、よほどヒマがあつたのか、なんらかのツイデがあつたのかなど、事情は皆目知れない。ともかく行つてみると、晩秋の日影にわずかながら咲き残る花ばなのようすは、まことに情趣に富むものであつた。そこで詠まれたのが、「水かれく」の一句だつた。

一読、発句としてかなり異例の詠みぶりであることに気づかされる。五七五の調子からはまるきりはずれているだけでなく、「歎」という、選択を促す疑問詞が立て続けに四度も重ねられている。「歎」の重層的語法は、菅原道真のこの歌によつたものであろう（『古今和歌集』）。

秋風の吹きあげに立てる白菊は花かあらぬか波のよするか

道真が三度も重ねた疑問詞「か」の語法をそっくりまねて、蕪村はそれ以上にしつこく四度まで繰り返してみせた。意味としては、水枯れの田島でんばたのなかにかろうじて見せる花は、蓼れいなのか、いやそうでないのか、あるいは蕎麦の花なのか、それも違

うのか、といった、ああでもない、こうでもないという、いわばぐずぐずと煮え切らない、うたい方をしてみせた。とても蕪村調とはいえないし、それどころか、そもそも俳句のテイすらなしていないと難じざるをえない代物なのである。それが没後一周忌を期して発刊された、『蕪村句集』に収録されたというのは、それなりのわけがあつたのだろう。

そこで注目すべきは、冒頭の「ひとり」のなにげない一語である。この吟行は単身で、門人や仲間など、同行者がいなかった。もししかるべき同行者がいたのであれば、疑問の植物について問いただすことができたはずである。ところがおのれ独りという状況では、それもかなわない。そこで不審は不審のまま、そのまま一句にほうりこむよりほかなかつた。自己完結型の発句において、かかる迷妄にくねる、自問自答の形式となつたのである。吾ひとりのつぶやきそのものが、発句として定着してしまつた。この経験は余人には共有しがたいもので、蕪村本人にもよほど得難い経験だったのでなかるうか。なればこそ、それをそのまま発句として残しておこうという気になつた。

もしこうした理解が妥当だとすると、そこでキーワードになるのが「ひとり」の語である。ことばとしてはなんでもないものが、この稀にみる経験、そして本作成立にとって必須の一語

となったのである。ここでの「ひとり」は、寂寥感とはまったく無縁であって、しかもこんな用法もあり得たのだとすると、かけがえのない一句と評してもいいだろう。

こうした独特の「ひとり」の効用があつたとしても、蕪村とてつねにこんな特殊技能ばかりやっていたのではない。つぎのようなひとり句も、蕪村はつくつてゐる。

人ひとり梨の木もとの月見哉

閑や碑いしづみをよむ僧一人

木曾路行ていざ年よら寄ん秋独り

秋されや我身ひとつの鳴子引

これらの句にはあきらかに、「ひとり」のわびしさや孤高の思いが詠まれている。ことに「木曾路行て」の句などは、空想ながら、旅する芭蕉に寄り添おうという意識すら見てとれる。かと思えば、またこんな作品も見られる。

なか／＼にひとりあればぞ月を友

泊る気でひとり来ませり十三夜

ひとり来て一人を訪ふや秋のくれ

すべて表向きは「ひとり」の語を詠みこみながら、「ふたり」になってこそその頼もしさや風雅を願っている句ぶりであるといえる。夜中の月が友になることもあれば、独り者ひとりものどうしの訪問や交友を悦びあうこともある。「頭巾二つひとつは人に参らせむ」といった句も、同行者への気遣いを秘めた句となっている。芭蕉の旅がほとんど同行者と連れだつてなされたものだったと述べてきたが、その一方で芭蕉はまたこんな文章も残している（『嵯峨日記』）。

廿二日 朝の間雨降。けふは人もなく、さびしまゝにむだ書してあそぶ。

元禄四年四月二十二日、嵯峨にあつた去来の別業「落柿舎」で、芭蕉がひとりきりになったときのことを語っている。ここにいう「むだ書」の一部であろうか、このあとさらにこんな文章がつづられる。

「さびしさなくはうからまし」⁽⁶⁾と西上人のよみ侍るは、さびしさがあるじなるべし。又よめる、

山里にこは又誰をよぶこ鳥独すまむとおもひしものを
独住ひとりずみほどおもしろきはなし。長嘯ちやうぜん隱子の曰、「客は半日はなじつの
閑を得れば、あるじは半日の閑を失ふ」と。素堂此言葉を
常にあはれぶ。予も又、

うき我をさびしがらせよかんこどり

とはある寺に独居ひとりぢて云し句なり。

独居への思いを詠じた西行の和歌を引いたのは、直後の「独
住ほどおもしろきはなし」をみちびくためだった。閑居のむな
しさではなく、それとは逆に、むしろよろこび・面白味を称揚
しようとさえしている。その半面、いつなんどきでも来訪者と
俳諧のやりとりをし、ときに旅にでようとすれば、同行者を求
めることもいとわない芭蕉であった。

「ひとり」でいる境涯を満喫するかとおもえば、他人と出会っ
て俳諧や旅の楽しみを分かち合う、この精神の転換こそ俳諧に
なくてはならぬ境地であつたにちがいない。

【注】

- (1) 現大阪市天王寺区の新清水寺。
- (2) 上野洋三著『芭蕉、旅へ』（岩波新書）のなかで、芭蕉の「旅

路の画卷」の第一図について、「ひとり旅」の画像を「旅だち」
の姿と解する可能性という見解が書かれている（二〇頁）が、
近世期の旅の一般的あり方や、芭蕉そのひとの旅姿であると
は断定されてはいない。旅の一般性とするよりも、画者芭蕉
の想念もしくは宿望としての旅姿と解するのが妥当か。「旅
路の画卷」の描写を、現実そのものの芭蕉像と考えないほう
がよい。

- (3) ここでは蕉門七部集と古典俳文学大系『蕉門名家句集』
上・下に収録される範囲の作に限定する。

- (4) 芭蕉と越人の「更科紀行」の月見行を送別する意をあら
わす。

- (5) 安永期の版本では、『伊賀餞別』と題して出版された。

- (6) 「訪ふ人も思ひ絶えたる山里のさびしさなくは住み憂か
らまし」（『山家集』）。

（ふじた しんいち／本学教授）